

## 組織的な若手研究者等海外派遣プログラム報告書

氏名： 佐藤 奈穂	提出日：平成 23年 9 月 14 日
<b>東南アジア研究所における職名：</b> * 右記の該当する職位に○をつけて下さい。(講師・助教・助手・ <b>ポスドク</b> ・博士課程学生・修士課程学生・学部学生)	
<b>派遣先の研究機関等(調査を実施した国名・機関名(日本語で記載)及びカウンターパート名)：</b> カンボジア 国立経営大学 カウンターパート：キム・ソチェッタ * 派遣先の研究機関等の種類について右記の該当する箇所に○をつけてください。(大学・ <b>研究機関</b> ・企業・その他)	
<b>派遣先の研究機関等での職名：</b> Visiting Researcher	
<b>派遣期間：</b> 平成 23 年 8 月 11 日 ~ 平成 23年 8 月 31日 (派遣日数： 21 日)	
<b>研究活動等の主な内容(該当する番号に○をつけてください。複数可)</b> ①研究・実験 <b>②フィールドワーク</b> ③セミナー ④インターンシップ ⑤サマースクール等の講習 ⑥学会出席 ⑦単位取得等 ⑧その他	
<b>研究活動の主な領域(該当する番号に1つ○をつけて下さい。)</b> ①人文学 <b>②社会科学</b> ③数物系科学 ④化学 ⑤工学 ⑥生物学 ⑦農学 ⑧医歯薬学 ⑨総合領域 ⑩複合新領域	
<b>派遣の概要(500~700字程度)</b>  博士論文では、所得貧困にとどまらない人間貧困を念頭に、カンボジアの一農村における定着調査から、死別離婚女性(メマーイ)がいかに所得貧困を回避し、リスクに対応しているのかについて①資産 ②所得 ③子の扶養という3つの側面から分析、論証を行った。 博士論文では十分に分析、論証することができなかった以下の点について明らかにするために再調査を実施するのが渡航の主たる目的である。再調査から論文の内容を充実させ、1つの書籍としても十分な価値を持つようなものへと発展させることを目指す。  村の生業に関するこれまでの調査および分析では調査時点の断片的な生業選択を明らかにするに留まっていた。今回の調査では、生業選択の変化について年代別、そして個人のライフ・サイクルに即した形での調査を実施する。そこから、村の経済構造の変遷とその特徴、それに伴う人びとの生業選択、その中でメマーイの生計戦略を立体的に描き出すことを目指す。 2010年度の追加調査では、調査村におけるメマーイへのインタビューから“製菓業”が調査村の女性の生計と密接に結び付いてきたことが再度確認できた。各時代のカンボジア全体の経済的背景とも関連させながら、調査村の生業の特徴とそこで製菓業が果たした役割を明らかにしたい。	
<b>事業に係る研究成果(500~700字程度)</b>  これまで調査対象地としてきたシェムリアップ州プオック郡I村の経済活動の歴史的変遷および周辺地域における位置づけを明らかにするために、以下の調査を実施した。  <b>1. シェムリアップ州プオック郡I村における聞き取り調査：</b>  主に製菓業に古くから従事する世帯に対し、年代ごとの経営状況、村内の従事者の状況等について聞き取り調査を実施した。I村の製菓業は、ポル・ポト時代以前から行われていた生業の1つであったが、ポル・ポト時代以降、水田面積が減少し、農業での生計維持が困難になったことにより、活発に実施されるようになった。ポル・ポト時代以降は、村内の7割ともいえるほどの世帯が製菓業に従事し、村の現金収入の大半を担っていた。しかし、輸入菓子増加により90年代以降は衰退傾向にあることが明らかになった。  <b>2. シェムリアップ州シェムリアップ郡~プオック郡での生業の特徴に関する調査：</b>	